

モラエスの庭
— (4) 生へのまなざし, 死へのまなざし —

宮崎隆義, 石川榮作, 佐藤征弥, 境泉洋

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

〒770-8502 徳島市南常三島町1-1

E-mail: miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp

Moraes's Garden
— (4) Looking to Life, and Looking to Death—

Takayoshi Miyazaki, Eisaku Ishikawa, Masaya Satoh, Motohiro Sakai

Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

1-1 Minami Josanjima-cho, Tokushima, 770-8502, Japan

E-mail: miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp

Abstract

This paper is an essay on Moraes's *O "Bon-odori,, em Tokushima* and *Ó-Yoné e Ko-haru*, part of the outcomes of the Project Studies by the activities in 2013 of Moraes's Studies Group launched in July 31, 2010. The members of Moraes's Studies Group, T. Miyazaki (English Literature, Comparative Literature), E. Ishikawa (German Literature, Comparative Literature), M. Satoh (Plant Physiology), M. Sakai (Clinical Psychology), all at the Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima, have been continuing to try to analyze Moraes's works and to approach new facets of Moraes's biographical aspects. Moraes was fascinated by the far-east Japan, and fell in love with Ó-Yoné, who died soon after the marriage. After her death Moraes decided to live in Tokushima, which was Ó-Yoné's hometown. He lived with Ko-Haru, Ó-Yoné's niece, for a while until she died from tuberculosis at the age of 21. His life until his death in Tokushima was a kind of hermit, disregard of his fame as Consul General and Navy high-rank Officer of Portugal, and other financial merits entailed with them. Moraes published *O "Bon-odori,, em Tokushima* in 1916 after Ó-Yoné died, and *Ó-Yoné e Ko-haru* afterwards. This work might be regarded as based on the forms of diary and essay, seemingly as reports from Tokushima to Bento Carqueja, editor of *Comércio do Porto* (Porto Commercial Newspaper) in Portugal. He consistently wrote these installment reports from Tokushima in the eyes of a stranger, putting some distance between him and the people in there. Everything seen in the eyes of Moraes wore some beautiful visional aspect because of his memory of Ó-Yoné. He expressed his thoughts on life and death throughout *O "Bon-odori,, em Tokushima* and *Ó-Yoné e Ko-haru* with fragmentary memories of his own as objective correlatives for the readers of his writings.

This paper is based on the presentation in the Symposium at the 49th Annual Conference of Japan Comparative Literature Association Kansai Branch held at the Faculty of Integrated Arts and Sciences, here in Tokushima.

Key Words: Wenceslau de Moraes, *O "Bon-odori,, em Tokushima*, *Ó-Yoné e Ko-haru*, Life and Death

1. はじめに

本研究は、徳島大学総合科学部学部長裁量経費・平成25(2013)年度総合科学部創生研究プロジェクト「グローバリズムとモラエス—モラエスが世界に広げた〈徳島の自然・人・心〉の再構築—」による研究成果の一部である。

本研究論文の目的は、プロジェクトの一環として開いている「徳島大学総合科学部モラエス研究会」の基本的な活動である例会・読書会での成果を基にし、モラエスの著作について新たな考察を加えると同時に、モラエスの実像について新しい側面を見出して、徳島におけるモラエスの存在の意義を問い直してゆくことである。

モラエスは、日本の日記文学、随筆文学に傾倒しながら、「随想」として徳島とそこに住む人々を眺め『徳島の盆踊り』を著しポルトガルの『ポルト商報』に連載発表した。しかしながら、「随想」の体裁を取り、日付の入った日記としての形も取り、同時にまた知人友人に宛てた書簡の側面と形式をも取っているこの作品は、結末部において彼が最初に意図していた「随想」とはかなり調子に変化していることがうかがわれる。モラエスがお手本のひとつとして参考にした紀貫之の『土佐日記』は、その根底には亡くした娘への想いが込められているが、同様に、自分の目で見た徳島とそこに住む人々を描きつつ、亡くしたおヨネへの想いが「随想」として込められたこの『徳島の盆踊り』、そしてその後の『おヨネとコハル』には、異邦人としてのポルトガル人モラエスの視線の先に、生と死に対する思いがにじみ出ている。モラエスが実際に目にしたものに自分の「随想」を絡め被せる時、「実」から「虚」への転換がなされ、この「随想」としての『徳島の盆踊り』は、質的な変化をきたし、「虚」の部分において普遍化を成し遂げているといつてよい。

前論文「モラエスの庭—(3)異邦人のまなざし—」では、徳島に住んだひとりのポルトガル人として、当時の徳島の人々から味わった疎外感、無邪気な子どもたちと親しくしていながらもその子どもたちのあどけない言葉遣いから感じざるを得なかった疎外感を扱い、異邦人としてのモラエスのまなざしを論じた。

本論文では、異邦人であり疎外感を感じざるを得なかったモラエスが、ふたりの女性おヨネとコハル

を看取った後も生きていかなければならない生を、そして老齢となり死を意識し始めた晩年に、生と対峙する死をどのように捉えていたのか考察を加えたい¹。

2. 断片化された記憶：生へのまなざし

—『徳島の盆踊り』²と『おヨネとコハル』³—

モラエスは100年前の1914年7月4日(という説が有力である)⁴に徳島にやってきたが、その理由については、諸説紛々としていて明確な理由はわからない。もっとも、およそ人の行動というものについての明確な理由や動機というものは、後付けのような部分もあつてはつきりとはしないというのが事実であろう。だがとりあえず『徳島の盆踊り』にも述べてあるように、おヨネが亡くなった後、おヨネの墓が徳島に作られたということが大きな理由として、モラエスは徳島に来る決心をしたと考えたい。モラエスには、自己韜晦の癖が見られるので、モラエスの書いていることがすべて絶対的な事実だということには少し留保しなければならないが、とにかく種々の憶測の理由はさておいて、おヨネの墓が徳島にできたことを一番の理由とするのが妥当であろう。

このノートに今書きつけたちょっとした覚えがきは私の現在の立場—零—を充分すぎるほどよく説明している。

隠棲地として徳島を選んだ理由については、これまた容易に説明がつく。

ほんのちょっと前—二年もまだ経っていない—八月のある午後、ある人が私の手を握りしめて、あることを熱心に求めた。かわいそうな人で、母親や兄弟姉妹、身内が多数いるのだが、誰ひとりそばにおらず、率直に言うと、彼女の

¹ 本論文は、平成25年11月16日に徳島大学総合科学部で開催した日本比較文学会第49回関西大会のシンポジウム「モラエスとハー—生へのまなざし、死へのまなざし—」で口頭発表したものを再考加筆したものである。

² 『モラエスの日本随想記 徳島の盆踊り』(このは文庫、徳島：徳島県立文学書道館、2010年3月)。

³ W. de Moraes, 岡村多希子訳、『おヨネとコハル』(東京：彩流社、1989年)。

⁴ 岡村多希子、『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官』(東京：彩流社、2000年)、238。

ことなどほとんどかまってくれない。彼女は、どんなにむずかしそうなことであっても、自分の願いを心からかなえようとしてくれる唯一の人は私であるということをよく知っていて、私に求めたのだ、自分の生命を永らえさせてほしいと。……

そして、私は彼女の願いをかなえてやらなかった。そうする力が私にはなかった。彼女はあきらめの言葉をつぶやき、最後の力をふりしぼって私の手を握りしめ(今でもその感覚が残っているかだっけ?……), 死んでいった。……

死の翌日、遺体は、日本ではほぼ一般的に行われている習慣にしたがって、神戸の火葬場で焼かれた。

遺骨はそのあわれな死者の生地である徳島に運ばれ、町のいくつかの墓地のひとつにあるささやかな墓石の下に納められた。

さて、数ヶ月経たある日、私は神戸で、義理もなく権利もない、全くの自由の身、まったくのひとりぼっちとなった。この単なる事実から、ある決意を即刻かためなければならぬことになった。

(中略)

答えはすぐには出なかった。というよりはむしろ、長いこと考えた。いくつかの案、いくつかの場所が頭に浮かんだ。その利害得失を検討した。そして、ついにおよそ次のように叫んだ。

「生者から逃れよ、徳島へ、お前になつかしい名前を思いおこさせる、お前に追慕の念を抱かせるあの墓のそばへ行け。

感情生活—お前になおも地平を開くことのできる唯一の生活—については、人はふたつのやり方でしか生きることにはできない。希望によって、追慕の念によってだ。人生の旅路のほぼ終わりにあってすべての希望が消え去るときに、追慕の念に慰めを求めることは当然だ。」

そして私は徳島に来了。

(『徳島の盆踊り』, 192-95)

モラエスが徳島に隠棲して16年、隠者で、貧しい孤独な暮らしをしていたとの印象が強いが、彼が銀行に残していた預金は総額で当時の金額で23,000円

ほどあった。今の貨幣価値に換算すると1億円以上、あるいは2億円近くにもなる⁵。モラエスがそんな預金を持っていながら鴨長明をまねて隠者、貧乏な長屋暮らしをしたのには、彼なりの美学があったのだろうと思われる。ポルトガル海軍の軍籍、総領事の地位と名誉など何もかも捨て去った「零」の状態、ひとりの人間としての存在状態が彼の考える理想の状態だったのであろう。何もかもから解き放れて初めてモラエスは、自分と向き合い、自分の内面を振り返ることができたのである。

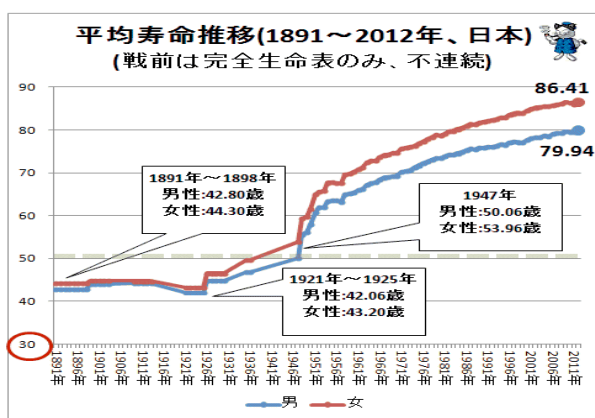
私は忘れていた—私がいけなかったのだ—名前と、ないも同然—零—になっている肩書のリストの記された私の名刺をまず最初に読者に渡すことを。実際、目的という点からしても、職業という点からしても、社会的活動という点からしても、私はこれ—零—である。零であるということは、ごくわずかの人が手に入れることのできる、しかも波瀾万丈ののちにやっと得られるきわめて特権的な立場を享受しているということである。私に関していえば、九年か十年のあいだずっと学校のかたい椅子の上でズボンをはき古し、それから見習いとして実生活に入り、四十年間休みなしに実務経験を積み重ねなければならなかった—謙遜なんかしているわけではない。そして、そのあとはじめて、やっこのことで、かくも超越的なこの社会的地位—零—の免状、学位を手にすることができた。

(『徳島の盆踊り』, 187-88)

またモラエスは年齢59歳にして徳島への隠棲を決意したが、その年齢を考えてみる時、やはり当時の平均年齢を少し念頭に置いておくことが必要だろう。今でこそ平均寿命が80歳を超えているが、平均寿命が50歳を超えたのはつい最近のことで、モラエスが徳島に来た頃、つまり1913年頃の平均寿命は50歳以下、43歳前後である。現代の高齢化社会の時代とは感覚が違い、生の短さ、老いと死への恐れというものはかなり違っていたであろうことは容易に予想される。

⁵ この点については、徳島日本ポルトガル協会会長桑原信義氏の調査による。

【厚生労働省：平成24年簡易生命表の概況】



従って、当時の人間の寿命ということを考えれば、モラエスが、鴨長明(1155-1216)に倣って老い先短い自分の死を見つめ隠棲したとしても、そう不自然なことではないのである。

モラエスは、『徳島の盆踊り』の中で日本の随筆文学に触れ、その例のひとりとして鴨長明の『方丈記』(1212)を取り上げているのであるが、彼自身、1897年、海軍士官の昇進を巡り当時中佐であったモラエスを超えて少佐のアントニオ・タロネ・ダ・コスタ・イ・シルヴァがマカオ港務司令官に任命されたことで、その人事異動に大きなショックを受けている。モラエスは、そんな自分の姿を、出世の道を閉ざされた日本の鴨長明にさらに強く重ねていたともいえるかもしれない。

随筆を書くということについて、モラエスは、読者、つまりポルトガルの『ポルト商報』(Comércio do Porto)の読者に以下のように宣言するような形で述べている。

私自身の随想をはじめることしよう。けれど、なおもうひとつ前おきの脱線を。前にも言ったが、私がこのジャンル—日記、随筆、とりとめもない覚えがき—を特に好むようになったのは、おそらく古の日本の作家たちのこれらの魅惑的な随想類の影響であった。それだけである。(『徳島の盆踊り』, 53)

モラエスは、「日記、随筆、とりとめもない覚え書き」として、このジャンルを好むようになったと述

べている。それは、

私たちヨーロッパ人は、たとえ隠棲しても、たとえ迷妄から覚めても、たとえ生の激動の旅の終わり、人種的特性である不安にみちた精神生活の終わりに近づいたとしても、その想像力は常に利己的に落ち着きなく苦悩にのたうちつつ働き、己れの悲しい不運にこだわり、失われた夢を嘆き、ついに、間もなく訪れる恐るべき神秘—死という化け物—におののくのだ！

(『徳島の盆踊り』, 54)

とあるように、「死」という化け物におののく自分の心に平安をもたらすためであり、先に述べた「日記、随筆、とりとめもない覚え書き」というものによって、モラエスというひとりの老齢を迎えている人間を媒介として、読者に対し過去に思いを至らせることを狙いとしているといつてよいだろう。

人生の夕暮れに、旅路のほぼ終わりになって、できる限り可能な限り自国のために働いてきたあとで、その義務と権利を棄て、貧しく、忘れ去られて、その同胞たちの正当な無関心の経衣につつまれて、遁世する可能性、口実、勇気を自らのうちに見出す人は幸いである。

(中略)

孤独の中で、貧しさの中で、野心のまったくない簡素な生活の中でこそもっともよく、老人は過ぎ来し歳月の思い出を喚びさまし、青年時代をよみがえらせ、それを判断し、論評することができる。そして、そうすることを恐れることはないのだ。

(『徳島の盆踊り』, 188-90)

モラエスが過去の平安時代の鴨長明に自分を重ねて、四軒長屋の片隅を自分の住居と定め、質素な生活をしたが、それは隠者として暮らすということのいわば生活の実践であるといつてよいだろう。モラエスが、この時代に隠者のような生活を実践したということ、当時のヨーロッパやアメリカの状況の中で考えてみると、19世紀にウィリアム・ワーズワース(William Wordsworth, 1770-1859)は「質素な生活と高邁な思索」(“plain living and high thinking,” Written

in London, September 1802, 19)ということ述べ、その生活が、ロマン主義が席卷する中でひとつの理想の生活と考えられていたといってもよい。ルソーの思想も然りであろうし、アメリカのエマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-1882)が推進した「超絶主義」(transcendentalism)、そしてその実践者であるソロー(Henry David Thoreau, 1817-1862)を視野に入れば、モラエスが目指したような生活が、ある意味で、19世紀知識人のいわば理想の生活のひとつでもあったと考えられる。19世紀の欧米で理想とされていた生活というものが、極東の日本では既に平安の時代に実践されていたことが大きな驚きであったことは、モラエスが日本の随筆文学を取り上げ賞賛し、「随想」として取り組むと宣言した点にもうかがえる。「随想」はモラエスにとって、ヨーロッパの知識人が求めた「高邁な思索」とほぼ同一のものといえてよいのである。

そして、そのあとはじめて、やっとのことで、かくも超越的なこの社会的地位—零—の免状、学位を手にすることができた。

(『徳島の盆踊り』, 188)

... ; e só após e a custo, é que me foi possível alcançar o diploma, o doutorado, d'esta posição social, tão transcendente:— zero.⁶

ここに見られるように、翻訳では「超越的」となっている「超絶的」(transcendente)という原文の言葉もあながち偶然とは思われない。

モラエスは「老人は過ぎ来し歳月の思い出を喚びさまし、青年時代をよみがえらせ、それを判断し、論評することができる。」(188-190)と述べているが、それは、時間的に、さらには空間的に対象から距離を置くということである。ポルトガルを離れ、ヨーロッパから離れて、遠く極東にある日本の、そしてさらに都会から離れた一地方都市である徳島に「貧しく、忘れ去られて」長屋に隠棲をしつつ、モラエスはひとりの老人として「過ぎ来し歳月の思い出を喚びさまし」ながら、それを「随想」として書き綴

っているのである。その書き綴るという行為は、肖像画を描く行為や、写真を写す行為と同様に、記憶というものをとどめ、瞬間を永遠化することである。『土佐日記』になぞらえて、日付を記した『徳島の盆踊り』のその文章は、モラエスの「日記」ともなっている。

日記を付けることは、言ってみれば時間を温存することである。歴史家にとってはなんの重要性もないような日々を、忘却の淵から救い上げることである。ブルーストは、『失われた時を求めて』の終わりの方で、「時間から身を引いた存在のさまざまな断片」があったことを発見したという。だがこれと同じ発見を、平安時代の女性作家たちもしていたのである。

同時に彼女らは、作家がそれに永続性を与えたいと願っているさまざまな印象を興味あるものにするには、ブルースト自身の言葉を借りて言えば、「その中にそれらが宿っている媒体、すなわち作者自身の中において、それらを隈なく知悉するように努め、その深奥まで見透せるぐらい、それらを明らかにしてみようとする」しかないことも、知っていた。

そしてこれこそ、初期日記作者から近代の「私小説」作家に至るまで、日本文学の中に一貫して流れる、一つの基本的性格に他ならないのである⁷。

上でドナルド・キーンも述べているように、日記を書くということは、「時間を温存すること」なのであり、「老人」となったモラエスは、「過ぎ来し歳月の思い出」を、「随想記」として書くという行為によって、過去の時間、記憶を温存しようとしているのである。その綴られた言葉、「時間から身を引いた存在のさまざまな断片」としての「随想」を読む読者は、「読む」という行為によって、彼が温存し記録した「思い出」、「記憶」を、「我がもの」として脳裏に浮かべ自分の過去を重ねあわせて振り返るのだといってもよからう。

それは、コハルを亡くして後に、モラエスが自分

⁶ Moraes, Wenceslau José de Sousa. *O "Bon-odori" em Tokushima (Caderno de impressões íntimas)*. PORTO: LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916, 198.

⁷ ドナルド・キーン『百代の过客』日記に見る日本人(上・下)』(朝日選書259, 260)東京:朝日新聞社, 1987年, 13-14.

の内面を赤裸々に吐露して書かれた『おヨネとコハル』にも引き継がれている。

未来の文学は敬愛の文学であろう（ピエール・ロチ、「ペキンの最後の日々」223頁によれば、孔子のことば）

夢と追慕に生きている哀愁の病気にかかっている人たちに、そういう人たちにのみ、このちよとした本はささげられます。他の人たち—大部分の人たち—は、このあとに続くページに目をやるという退屈なことはいらない方がよろしいでしょう。

知りあいであろうとなかろうと、思想によって結ばれている同胞たち、私が話しているのと同じポルトガル語を話す同胞諸氏は諸君の国から—私たちの国から—かくも遠くはなれた日本で書かれた老人のこのたわごとのなかに、諸君に諸君自身の過去を思い出させ、かつて起こり、永遠に失われてしまったことどもを追慕させる何か小さな断章を恐らく見出すでしょう……。そして、そのときには、諸君の私に対する共感、諸君の側にも狭い正当な相互性を見出すでありますし、それは、私を慰撫してくれるでしょう。 1920年1月 徳島にて

ヴェンセスラウ・デ・モラエス⁸

A litteratura do futuro será a litteratura da piedade. (Sentença de Confucio, segundo Pierre Loti, no livro *Les derniers jours de Pékin*, pag. 223.)

Áquelles que fôram tocados do mal da tristeza, que vivem do sonho e da saudade, e só áquelles, é offerecido este livro insignificante. Os outros—a grande maioria—melhor farão, poupando-se ao enfado de relancear as paginas que vão seguir-se.

Irmãos pelo pensamento, conhecidos e desconhecidos, irmãos que falaes a mesma lingua portugueza que eu falo, encontrareis talvez, n'estas divagações de um velho, escriptas no paiz japonéz, tam distante do

vosso—do nosso, —algum pequenino trecho disperso, que acuda a chamar-vos ás recordações do vosso proprio passado, á saudade das coisas occorridas, perdidas para sempre. . . E então, a sympathia que me mereceis encontrará do vosso lado uma justa reciprocidade complacente, que me dará consolo.

Tokushima, Janeiro de 1920⁹.

モラエスが生きた時代を今少し考えてみると、19世紀の後半には、ダーウィンの『種の起源』(*The Origin of Species*, 1859)が登場し、進化論によって人間は時間というものを意識し始めたといえる。過去、現在、未来という直線的な時間の意識と概念を進化の考え方から具体化するかのようになり、1851年に登場したロンドンでの第1回万国博覧会は、さらに人々の時間に対する意識を展示の仕方によって変えたといってもよいだろう。モラエスも1903年日本で開かれた第5回内国勸業博覧会に関わって、ポルトガルの物産の展示に奔走して成功させているが、博覧会での展示は、現在を過去と未来に相対化させて直線的に具体的に示すと同時に、部分というものを提示して全体を想起させるいわば「換喩」(metonymy)であるといってもよい。展示された一部の物産、物品から、国という全体を想起させるのである。

日記というものによって、「過ぎ来し歳月の思い出」を部分として提示すること、それは断片化された「過去」の提示であり、奇しくも、モダニズムが席卷し始めて、エリオット(T. S. Eliot, 1888-1965)が「客観的相関物」(objective correlative)を、鮮烈な断片化されたイメージとして集成し著した1922年の『荒地』(*The Waste Land*)を念頭に置くと、ハーンを尊敬し真似たといいいながらも、モラエスもそのモダニズムの渦中であって、老人の「随想」、つまりは断片化された「追想」、過去の「思い出」を、いわば「客観的相関物」として読者に提示しているのである。

その点で、『おヨネとコハル』の冒頭にエピグラムとして引用されたロチの言葉、そしてそれに添えられた1920年のモラエスの言葉は、彼の「随想」とし

⁸ 岡村多希子『おヨネとコハル』(東京:彩流社, 1989年), 序。

⁹ *Ó-Yoné e Ko-Haru*, EDIÇÃO DE A «RENASCENÇA PORTUGUESA», PORTO, 1923.

て書かれた『おヨネとコハル』の性格を示しているといえるだろう。

3. 生と死が重なりあう領域「徳島(Tokushima)」: 死へのまなざし

『徳島の盆踊り』を概観してみるに、徳島にやってきた印象をモラエスは次のように述べている。いかにも清々しい初夏の様相だが、実際には7月の暑さに、モラエスは閉口している。それはその後毎年のようにポルトガルにいる妹フランシスカに絵葉書で書き送っている。

夏の晴れた日の午後—正確に言うと、一九一三年七月四日の午後—船を下りて、私のために用意されていたごくささやかな住居に歩いていたときに受けた徳島の第一印象は、これ緑・緑・緑・緑・緑という圧倒的な、だが快い印象であった！ 陶酔した瞳の中にどっと入り込む緑、ふるえる鼻孔にどっと流れこむ緑、緑、緑、緑一色！……何ひとつ考えることをゆるさない、目の前にくりひろげられてゆく風景のディテールに注意を向けることをゆるさない、まことに強烈な、排他的な印象。色と香りによって生み出された陶酔感とでも言えよう。

(『徳島の盆踊り』, 59-60)

1913年

7月15日 とても暑い。

7月25日 ひどく暑い。焼けつくようだ。リスボンでもとても暑い由。

7月29日 僕は元気だが、とても暑い。

8月9日 ひどく暑い、日本中そうだし、恐らくそちらもだろう。

8月13日 ひどく暑い、…¹⁰

おヨネのふるさと徳島を隠棲の地と定めた気持ちを反映してか、モラエスの目に映った徳島はあくまで美しく、そこに住む人達も幸せな人間たちと彼の目

には映っている。しかしながら、徳島の人たちの微笑みに、彼は「異邦人」として見られ、そのほほ笑みに軽蔑の念がこもっているという現実気付かされる。親しくしている子供からも「けとーじん」と無邪気に呼ばれることに異邦人としての孤独感を彼は強めている。その文章のあとに描かれた、檻に入ったオランウータンのイラストは彼の手によるものであると同時に彼の心象を的確に表している。

そして、その印象は実に魅惑的であり、私は慈悲と恩寵の雰囲気につつまれて、通りすがりの人たちに思わず微笑みかけた。そして、その人たちも微笑みを返してくれたので私はその微笑みを、避難所として選んだこのもてなしのよい土地で心身の疲労を回復するようすすめてくれる心やさしい挨拶の言葉と解して、感謝したのであった。それが私の思いちがいであったことを、そしてヨーロッパ人を心底憎悪している無愛想で保守的なこの善良な徳島人の微笑みは、打明けたところ高齢のために背が曲がり、骨ばり、老いぼれた、このグロテスクな私という見本がまずいことに代表している白人に対する軽蔑と反感を、単にあらわしているにすぎないことを知ったのは、のちになってである。顔の半分をおおう私の長いもじゃもじゃのひげが、ひげのほとんどないさっぱりとした顔に立ちまじって、私をよりいっそう滑稽なものにしていたのである。 (『徳島の盆踊り』, 61-62)

まだ七歳にならないけれども小学校の一年生のひとりの子は、私と話すとき、私をていねいに「とーじんさん」(「さん」はセニョールにあたる)と呼ぶ。

「とーじんさん」はすなわち未開人、野蛮人、異教徒という意味であるが、昔のポルトガル人がモーロ人やユダヤ人を呼ぶときのペロ〔犬〕に多少似た、侮蔑的な調子がいくらか含まれる。日本語にはまた中国人と区別して特にヨーロッパ人を指すのに、「け・とーじん」すなわちひげづらの未開人という語がある。

ここ徳島で、ひとりで散歩をしていると、いたずらっ子や野卑な人たちが通りすがりにその罵りのことば—「とーじん！」とか「け・とー

¹⁰ 岡村多希子『モラエスの絵葉書書簡』(東京:彩流社, 1994)より。

じん」一をときどき口にする。日本の他の場所でも同じことがすでにあったけれども、ここほど頻繁ではなかった。(『徳島の盆踊り』, 256-57)



そうした人々に囲まれて暮らしながら、モラエスは、ハーンの「日本の庭で」や「家庭の祭屋」¹¹に倣ってか、「盆踊り」というものの説明から、武士の家の作り、庭、庭の石、玄関、居間、そして仏壇、その中においてある位牌の説明と、細々と徳島の情景を印象記として描いてゆくが、彼の描く徳島の情景は、過去の記憶を呼び起こす媒介としてのひとつの大きな庭となっている。「随想」という日記体の文章の中に浮かび上がる「徳島」は、楽園としての「徳島」であり、さらに四軒長屋の彼の住まいにある小さな庭は、彼の記憶、「思い出」につながるものであろう。

「思い出」の手掛かりとなっている居間の中に「火鉢」がある。

「ひばち」

私の家、そして日本のどの家にもふんだんにある日本のちょっとした家庭用品の中で、その美しさとその有用性によって傑出するのは、hibachi (「ひばち」とよんでくれたまえ)「ひばち」である。

(中略)

しかしながら、あわれな小娘を非難するまい。誰にも適性というものがある。彼女にはこういうことには適さないのだ。日本人の家庭では、私が今説明しているこの「ひばち」の世話は女中にはまかせない。この道具は、用途、役割において他の火鉢にはるかに立ち優っているのだ。確かに火鉢ではあるが、火鉢以上のもの、祭壇

なのである。念入りに髪を結びあげ、美しい絹の着物をまとい、よい香りのする華やかな小さな神の祭壇。私達は実際、朝から晩まで、夜ふけまで、その祭壇のそばにその神を見かける。私は神と呼んだ。女神と言う方がよいかもしれない。神であれ女神であれ、座蒲団の上に坐っているその人物は、誰かが特別の敬虔の念から火鉢のそばに毎日据えに来る陶製の小さな仏陀のように見える。だが、神ではない、だが、女神ではない、だが、仏陀ではない。その家の女主人にすぎない。……

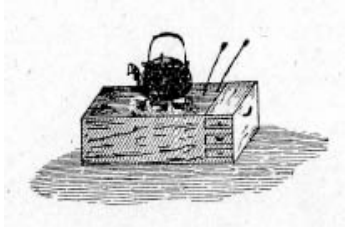
ふつう日本の主婦は昼間と夜の大部分をその「ひばち」のかたわらですごす。何もしていないか、ほとんど何もしていないように見える。近くで観察すると、彼女が絶えず火鉢を拭き、木を磨き、精巧な道具で灰をかきならし、炭を寄せ、水のいっぱい入った優美なやかんののっている火をかき立てているのがわかる。まわりにはお茶をいれる道具があり、裁縫箱があり、他の家庭用品がある。ときどき主婦はお茶を何口か飲み、金の煙管で煙草をふかし、細かい針しごと指を動かし、計算機である「そろばん」をはじく。見たところ、こどものように戯れている。だが、戯れているのではない。身体が小さく、人形のようにほとんど動かずに身ぶりも小さいが、主婦は家庭の魂である。しょっちゅう彼女のそばに来て跪く女中たちに簡潔な命令をささやくのは彼女である。整頓、清潔さ、快適さ、従順さ、規律を維持するのは彼女である。柱時計にねじを巻くように家庭の機械に毎朝ねじを巻くのは彼女である。食事のときに家族が集まるのは彼女のまわりである。夜の長い団欒に家族が集い、はなしをし、新聞記事に論評を加え、楽器を弾き、お茶をすすり、煙草をふかすのも、彼女のまわり、「ひばち」のまわりである。……

一家の主婦がいない、火鉢のそばに坐る陶製の仏陀がいないと想像してみたまえ。「ひばち」の聖火はたちまち消える。埃がおおう、湿気が金属部分を錆びつかせる。やかんの湯が冷める。同時に、乱雑、居心地の悪さ、無秩序が、建物を上から下まで蝕みにやってくる白蟻の群れのように、共謀して家庭に襲いかかる。……

¹¹ 小泉八雲著、平川祐弘編『神々の国の首都』(東京：講談社学術文庫 948, 2013年)所収。

それでも、私は、白人で金髪碧眼で孤独な老人である私は、私の日本の家に家庭の「ひばち」をそなえたかったのだ!

(『徳島の盆踊り』, 147-50)



この「火鉢」のそばに居てほしかった女中が、暗におヨネを示していることは明らかだが、それを、「家庭の天使」(the angel in the house)¹²のイメージと重ねることに無理があるだろうか。若き日の人妻マリア・イザベルとの禁断の恋、亜珍との結婚と不和の生活、おヨネと結婚式を挙げたとも挙げなかったともいわれるが、彼がその時々で愛した女性との生活は、やはりこの火鉢のそばの女中、いわば暖炉のそばの幸せな一家の集まり、ささやかな家庭というもの、そうした願望が潜んでいたであろう。

日本人々にとって、死者が、死んで忘れられる者ではなくて、生者とともに生きているという捉え方は、ハーンを受け継いでいるとはいえ、亡くなったおヨネへの思いもあり切々とした現実感が感じられる。死者は、単なる不在者であり、生者とともに生きているということ、死者が生者のためにあるということは、老齢を迎えた彼の、日本での生活の中の発見であったろう。

……確かなことは、私が接するこの現世の家族は信仰と愛にあふれて死者たちとともに暮らし、毎日彼らの世話をし、彼らを励まし、彼らに頼みごとをし、彼らの写真を眺め、彼らに言葉をかけ、彼らの名前を呼び続けていることである……ただし、その名前は生前の名前ではない。「かみみよー」(戒名)で呼ぶか単に一般的な言い方で「ほとけ・さん」—仏さん—という言葉が使われている。

¹² 19世紀ヴィクトリア朝期に生まれた理想的な女性像で、Coventry Patmore (1823-96)の *The Angel in the House* (1855-56) のタイトルから生まれた。

したがって、正しくは、死すなわち家族成員の絶対的除去は起こらないのである。生者と死者とのあいだには、現にそこにいる成員とそこを留守にしている成員とがいるにすぎない。

(中略)

一年に一度、死者の霊は地上にお下りになって数時間かつての自分の家庭をご訪問になる。家族には彼らは見えないが、予見できる。彼らは感じはしないが、予感できる。最高の賓客をもてなすように彼らをもてなし、ごちそうする。ここ徳島では彼らのために踊りを踊る。「ぼん」である、「ぼん・おどり」である。

(『徳島の盆踊り』, 234-35)

徳島で毎年の夏開かれている盆踊り、今の阿波踊りは、死者を迎える踊りである。その原型は徳島市の津田という漁師町に伝わる「ぼに踊り」であるといわれているが、海で命を落とした死者に向かって「もんでこいよ」と呼びかける哀切な呼び声から始まる踊りが、死者の魂を迎えるものであることに、モラエスは驚きと同時にうらやましさを覚えている。

あちらに見慣れないものが来ました! ……見たところ八十歳ばかりの婆さんが、身体を海老のようにまげて(海老はこの事実ゆえに、日本では長寿の象徴なのです)、ギターに合わせて、死者のために小唄を口ずさみながら、にこにこ笑って大胆にも街路を進んでゆきます。やあ、いいぞ、頑張れ、婆さん! ……みんなはやさしく笑い、彼女はうれしそうです。あの婆さんは来年はもはやこの世の人ではないかもしれない、そのときには死者のために小唄を口ずさむことはできない、娘か孫娘か誰かが街頭に出て、彼女のために小唄を口ずさむことでしよう。……

しかし、これらことごとくが私にはなんと不思議に思われることか、幻か、夢か—

(『徳島の盆踊り』, 312-13)

毎年行われる盆踊りに、自分の死後、生きている者達が自分をいつまでも覚えて思い出してくれることを願いつつ、盆踊りに興じるひとりの老婆に自分を重ねながら、モラエスは生と死を見つめている。

しかしながら、次にあるように、複数形で示された死者たち、それが、おヨネと他の亡くなった者たち、それが誰なのかはわからないが、その死者たちが自分の元には戻ってきてはくれないとの思いは、異邦人としての悲しみと同時に、彼の死者たちへの思いと生を長らえている自分への想いが重なっていよう。

1915年10月3日

もうおそい、私は「ぼん・おどり」に背を向けて、心が沈み悲しくなって家に帰ります。・・・・・・・・彼ら、これらの日本人はみな、自分たちの死者たちと霊的に接触してまだ間がなく、心たのしく幸せにあふれ、くつろぎ、踊っています。明日は、気持ちをとりなおしていつもの暮らしに戻るでしょう。私はちがいます。私は私の死者たちと接触しませんでしたし、誰も彼らについて何も私には話してくれませんでしたし、祭りに意識的に参加することはできませんでした。・・・・・・・・

それでも、我が友よ、私は、ここで彼ら、私の死者たちと親しい関係になれるのではないかという期待を、口には出さないまでも心に深く秘めて徳島に来たのです。・・・・・・・・

(中略)

ところが、抱いていた期待とはうらはらに、私は死者に一度も会ったことがなく、その声を一度も聞いたことがなく、死者を一度も感じたことがありません！・・・・・・・・

私たちの死者たち！私の死者たち！・・・・・・・・このうんざりした打ち明けばなしが、多少明らかにしているように、私は死者たちのことを絶えず考えます。けれども正直言って、死者たちのことが理解できないのです。わからないのです。

(中略)

私たちの死者の思い出、つまり追慕は、私たちをただ苦悩させるだけ、それだけです。

さようなら、我が友よ。

敬具

1915年8月27日

貴殿を心より敬愛する W. デ・モラエス
(『徳島の盆踊り』, 313-15)

E no entretanto, meu amigo, eu vim para Tokushima com a esperança inconfessada, mas profundamente sentida, de entrar aqui em íntimas relações com eles, com os meus mortos...

Os nossos mortos ! Os meus mortos !...

e também, logicamente, o pessimism e o culto pela dôr. A lembrança, ou melhor

— a saudade — dos nossos mortos faz-nos simplesmente sofrer, nada mais.

Adeus, meu amigo.

Mais uma vez me subscrevo. Seu muito dedicado

W. de Moraes

モラエスのこの悲痛な叫びをたたえた文章は、「随想記」としての日記から、カルケジャに宛てた「書簡」へと変質している。日記から書簡へと変質したものが、コハルの死後書かれた『おヨネとコハル』に受け継がれているのであるが、この作品は「随想」ありながら「私小説」の域に至って、モラエスの、これまで自己韜晦によって隠されていた内面が赤裸々に描かれているといってもよい。

未来の文学は、哀れみの文学であると述べたロチの言葉を巻頭に掲げた『おヨネとコハル』は、断片化されたひとりの人間の記憶、それを換喩として読む者にそれぞれの記憶の想起を促し、「想像」(imagination) という力によって、誰もが自分自身の過去を省みることを意図されていると考えてよからう。そしてそれはまた、『徳島の盆踊り』も同様に、「徳島」という極東にある日本の一地方都市を換喩として、そこに生きる人々、庶民の世界を通して、生と死を見つめて生きる、生きていかざるを得ない人間というものの姿を、モラエスというひとりの人間を換喩として提示していると考えてよいのである。

参考文献：

- アルマンド・マルチンス・ジャネイロ、野々山ミナ子・平野孝国訳『夜明けのしらべ—モラエス・人と作品』東京：五月書房、1969年。
ヴェンセスラウ・デ・モラエス、岡村多希子訳『徳島の盆踊り』ことのは文庫、徳島：徳島県立文学書道館、2010年。
—————。『おヨネとコハル』東京：彩流社、1989

年.

岡村多希子. 『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官』東京: 彩流社, 2000年.

紀貫之. 『土佐日記 貫之集』(新潮日本古典集成) 東京: 新潮社, 1988年.

ドナルド・キーン. 『百代の過客—日記に見る日本人(上・下)』(朝日選書 259, 260) 東京: 朝日新聞社, 1987年.

徳島県立図書館. 『モラエス案内(増補再販)』徳島: 徳島県立図書館, 1995年.

徳島県立文学書道館. 『モラエス生誕150年・ハー
ン没後100年 モラエスとハー
ン展 東洋に魅せられた二人の西洋人』徳島: 徳島
県立文学書道館, 2004年.

花野富蔵. 『日本人モラエス』東京: 大空社, 1995
年.

Moraes, Wenceslau José de Sousa. *O "Bon-odori,, em
Tokushima (Caderno de impressões intimas).*
PORTO: LIVRARIA MAGALHÃES &
MONIZ, 1916.

———. *Ó-Yoné e Ko-Haru*, EDIÇÃO DE A
«RENASCENÇA PORTUGUESA», PORTO,
1923.